

セロ弾きのゴーシュ

## 目次

ゼロ弾きのゴーシュ.....	3
----------------	---

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのです。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲（こうきやうきく）の練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼（め）を皿（さら）のようにして楽譜（がくふ）を見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額（あせ）に汗を出しながらやっといま云（い）われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍（う）ちました。

「セロフ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込んだりじぶんの楽器をはじめて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みましました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさつきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

それらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏んでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸

君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあの金杵鍛冶だの砂糖屋の丁稚なんかの寄り集りに負けてしまったらいったいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかつきりボックスへ入ってくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマツチをすったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシュはその粗末な箱みたいなセロをかかえて壁の方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙をこぼしましたが、氣をとり直してじぶんだけたったひとりいまやったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くゴーシュは何か巨きな黒いものをしよってじぶんの家へ帰ってきました。家といってもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前

は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすきになるといつ

も出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるときっきの黒い包みをあけました。それは何でもない。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床ゆかの上にそつと置くと、いきなり棚たなからコップをとってバケツの水をぐくぐくのみました。

それから頭を一つふって椅子いすへかけるとまるで虎とらみたいな勢いきおいでひるの譜を弾きはじめました。譜をめぐりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまつ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄ものすごいい顔つきになりいまにも倒たおれるかと思うように見えました。

そのとき誰たれかうしろの扉とをとんと叩たたくものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫さけびました。ところがすうと扉おを押してはいって来たのはいままで五六べん見たことのある大きな三毛猫みけねこでした。

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬うんぱんはひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの茎をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行つてしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでやにやわらつて云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしやくにさわつてこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いや、遠慮はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかり真っ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに気

を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思つたか扉にかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室のなかへ半分ほどはいつてきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思つたかまづはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎつしりつめました。それからまるで嵐のような勢で「印度の虎狩」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からばちばち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがつてしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようなにはせあるきだ



しました。ゴーシュはすっかり面白くなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがつてはねあがつてまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあとはしばらく青くひかるのでした。しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とって

「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖った長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒れたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉へ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻つて来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていました

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走つて行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐつつりねまりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそつくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずぐごうぐやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井てんじょうの穴からぼろんと音がして一疋びきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼なくのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのでは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかつてるなら何もおれの処<sup>ところ</sup>へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついでうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾<sup>ひ</sup>いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかつこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなにでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやつてごらん。」

「こうですよ。」 かつこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かつこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響樂（じふいっきようがく）も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どちらがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かつこうかつこうかつこうかつこうかつこうとつづけてひきました。

するとかつこうはたいへんよろこんで途中（とちゆう）からかつこうかつこうかつこうかつこうについて叫（さけ）びました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシュはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかつこうは残念そうに眼（め）をつりあげてまだしばらくいないでしたがやつと

「……かつこうかくうかつかつかつかつか」と云つてやめました。

ゴーシュがすっかりおこってしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるんじゃないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか。」かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かつこうは「くつ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいます。」とやってまた一つおじぎをしました。

「いやになっちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかつこうはまたまるで本気になって「かつこうかつこうかつこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になつてしまふんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴ

たりとセロをやめました。

するとかつこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらつとしてそれからまたさっきのように

「かつこうかつこうかつこうかつかつかつかつ」と云つてやめました。それから恨めしうにゴ  
ーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」  
と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしていられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるん  
じやないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになつてそこをまつ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから。」

かつこうはまた頭を下げました。

「黙れつ。いい気になつて。このばか鳥め。出て行かんとむしつて朝飯に食つてしまうぞ。」ゴーシュ  
はどんと床をふみました。

するとかつこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子

にはげしく頭をぶっつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓をあけようとしたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかつこうがばつとぶっつかつて下へ落ちました。見ると嘴くちばしのつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っていろつたら。」ゴーシュがやっと二寸ばかり窓をあけたとき、かつこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらをみつめて、あらん限りの力をこめた風ではつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたつてかつこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかつこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して碎くだけ窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行つてとうとう見えなくなつてしまいました。ゴーシュはしばらく呆あきれたように外を見ていましたが、そのまま倒たおれるように室へやの



すみへころがつて睡ねむつてしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯いっぱいのんでいますと、また扉とをこつこつ叩たたくものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払はらつてやろうと思ってコッブをもったまま待ち構えて居おりますと、扉がすこしあいて一疋の狸たぬきの子がはいってきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてほんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬきじりということを知っているかっ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座すわったままどうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたつて

「狸汁つてばく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出ふそうとしましたが、まだ無理に恐こわい顔をして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮にておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行つて習えと云ったよ。」

と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」

狸の子は俄に勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの駒の下のところを拍子をとつてぼんぼん叩きはじめました。それ

がなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれは面白いぞと思いました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやつと考えついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんと叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしょってゴ

ムテープではちんとめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行つてしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいってくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡つて元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていきますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一びきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらしいしかなないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわろうというようにきよろきよろしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむつとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていましたでしたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんのおばあさんもおりましたし狸さんのお父さんもおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気などなおしてやったことはないかな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行つたがね。ははん。」ゴーシュは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児はどうせ病気になるならもつと早くなればよかった。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにびたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびっくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや鬼の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼<sup>め</sup>を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療<sup>なお</sup>すのでございます。」

「すると療<sup>なお</sup>るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療<sup>なお</sup>る方もあればうちへ帰ってから療<sup>なお</sup>る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるといふのか。よし。わかつたよ。やってやろう。」ゴージュはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔<sup>あな</sup>から中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おつかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおつかさんの野ねずみをセロの孔<sup>あな</sup>からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたきながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫さ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをぐこうがあが弾きました。するとおつかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合ぐあいをきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山たくさです。どうか出してやつてください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところに手をあてて待っていましたら間もなくこどものねずみが出ました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるぶるふるふるえていました。

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるぶるふるえていましたがにわかに起きあがって走りだした。

「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おつかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシュの前に来てしきりにおじぎをしながら

「ありがとうございますありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴーシュは何がなかあいそうになつて

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびつくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨らんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんど参れましよう。」と

云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしつて野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになつて泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「ああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどつかり倒れてすぐぐうぐうね



むってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールひかえしつの裏にある控室へみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもって、ぞろぞろホールの舞台ぶたいから引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音はくしゅがまた嵐あらしのように鳴って居おります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉うれしきでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマツチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだばち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかわいような手がつけれられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいって来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなって答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶ちよつとあいさつしてください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆氣にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもつてじつに困ってしまつて舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながつてばかり火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあったあのように眼

をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思ってみんなの間をさつさとあるいて行つて向うの長椅子<sup>ながいす</sup>へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらつてゐるようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本氣になつて聞いてたぞ。

一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通<sup>ふつう</sup>の人なら死んでしまうからな。」楽長<sup>が</sup>向うで云っていました。

その晩遅く<sup>おそ</sup>ゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。

そしてまた水をがぶがぶ呑<sup>の</sup>みました。それから窓をあけていつかかっこうの飛んで行つたと思つた

遠くのそらをながめながら

「ああかつこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃなかつたんだ。」と云いました。

底本…「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力…水口充、野口英司

校正…野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。  
入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ゼロ弾きのゴーシュ

発行日 令和元年 7 月 31 日

著 者 宮沢賢二

発行者 長尾貴憲

発 行 一般社団法人日本電子書籍技術普及協会  
大阪府大阪市北区梅田 1-11-4-1000

© kenji miyazawa, JETDA 2019